

山梨大  
読売講座

# ロボットが害虫検査

山梨大学と読売新聞甲府支局が共催する連続市民講座第9部「創る山梨のチカラを活かして」の第4回講義が16日、甲府市武田の同大で開かれた。工学部の石田和義准教授（ロボット工学）が「工学を用いた農業の効率化と地域の農業に活かすロボットシステム開発」と題して語った。写真。



## 石田准教授 桃 傷めず的確に

農業用ロボットはすでに、除草ロボットや、イチゴ、トマトの収穫ロボット、茶摘みロボットなどが開発されている。山梨大で現在取り組んでいるのは桃の害虫被害を検査するロボットだ。

県内の桃農家は海外輸出に力を入れている。しかし、2010年に主要な輸出先である台湾で幼虫が桃から見つかり、台湾への輸出が4か月間禁止されたことがあった。石田准教授によると、「幼虫が果実を開ける穴はシャープペンシルの芯

1分間に6個を検査できるようスピードアップするのが目標で、「将来はリンゴや梨、スモモにも応用したい」という。

次回は9月17日、教育学部の井坂健一郎教授が「生活の中に存在する『アートの種』と私たちの心と暮らしを豊かにする現代美術」と題して講演する。

◇  
16日の講義の詳細は27日付朝刊に掲載予定です。